〈戰士，乾杯！〉日譯剖析

賴錦雀
東吳大學日本語文學系

中文摘要

本論文旨在分析下村作次郎所翻譯的黃春明散文〈戰士，乾杯！〉之日語版的翻譯策略。首先鳥瞰台灣文學的日譯狀況及翻譯理論先行文獻之後，從文化詞、人稱代名詞、文體、使役與被動、調整、後設表述等觀點剖析〈戰士，乾杯！〉之日譯技巧。結果顯示，善用轉位、增譯、減譯、變譯、反譯、分譯、合譯等技巧的歸化方式所敘述的下村作次郎日語譯作具有簡單化、常態化、明朗化的特徵。而其流暢的描述方式，的確達到了台灣文化對日語社會的文化傳播功能。

關鍵詞：黃春明、〈戰士，乾杯！〉、下村作次郎、翻譯策略、歸化、文化傳播

*本文經外審後刊登

日本語訳「戦士、乾杯！」の解剖

賴錦雀
東呉大学日本語文学系

要旨

本論文は下村作次郎による黄春明作〈戰士，乾杯！〉の日本語訳「戦士、乾杯！」を対象に、その翻訳方略を分析したものである。まず、台湾文学における日本語訳の事情を考察し、翻訳理論の先行研究を概観したあと、文化詞、人称代名詞、文体、使役と受け身、調整、メタ表示という視点から「戦士、乾杯！」の翻訳ストラテジーを考察した。その結果、日本語への同化のために転位、増訳、減訳、変訳、反訳、分訳、合訳が多く用いられる「戦士、乾杯！」の日本語訳は簡素化、正規化、明示化の特徴を持つことが分かった。そして、いきいきとした叙述形態によって日本語社会への台湾文化伝播という役目が果たされたと思われる。

キーワード：黄春明、「戦士，乾杯！」、下村作次郎、翻訳ストラテジー、同化、
台湾文化の伝播

An Analysis of the Japanese translation of Huang Chunming's ‘To the Warriors!’ by Shimomura Sakujiro

Lai, Jiin-Chiueh
Department of Japanese Language and Culture, Soochow University

Abstract

The purpose of this paper is to analyze the translation strategies of the Japanese version of Huang Chunming's ‘*To the Warriors!*’ translated by Shimomura Sakujiro. Given the circumstances of Japanese translation in Taiwanese literature and the previous studies on translation theory, Shimomura’s translation strategies of ‘*To the Warriors!*’ translated are explicated from the perspectives of cultural words, personal pronouns, style, causative and passive expressions, modulation, and meta-representation. This paper shows that Shimomura Sakujiro uses many domesticating strategies such as transposition, addition, deduction, variety in translation, mutual transformation of affirmative and negative, translation in reverse order, splitting, combination. In addition, there are features of simplification, normalization, and explicitation. Shimomura’s smooth description does indeed serve the purpose of cultural transmission of Taiwanese culture to the Japanese society.

Keywords: Huang Chunming, ‘*To the Warriors!*’, Shimomura Sakujiro, translation strategy, domesticating strategy, transmission of Taiwanese culture.

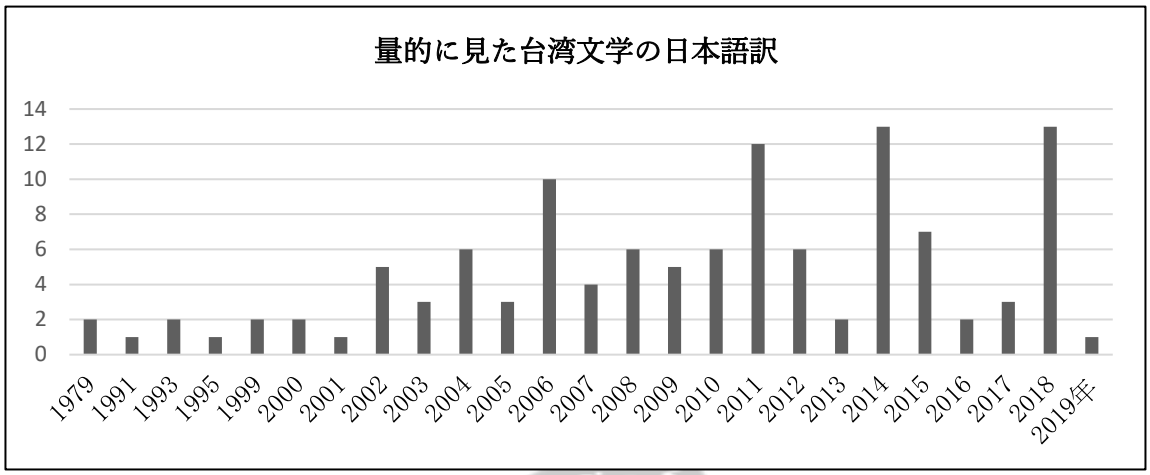
日本語訳「戦士、乾杯！」の解剖

1.はじめに

台湾では経済高度発展によって、自国の文学作品を外国語に訳して外国語読者に紹介することの重要性に気付いた。その背後には世界規模のグローバルな現象とグローカルな地元文化の両方を大事にする考え方が見られる。1990年代、文建会で「中書外譯計畫」が行われ、台湾文学の世界への出口が開かれた。2000年までは日本語、ドイツ語、フランス語、チェコ語、スウェーデン語、オランダ語、ロシア語、モンゴル語などの台湾文学の翻訳が出版された。内容から見れば中国古典文学、台湾文学、先住民文学、児童文学、民間の昔話、評論集、散文集などいろいろあるが、言語別から見れば英語訳と日本語訳が多かった。

2011年に「中書外譯計畫」が国立台湾文学館に移され、「國立台灣文學館台灣文學翻譯出版補助計畫」になったが、それ以降台湾文学の翻訳が中心になった[1]。1990-2013年における台湾文学の翻訳助成案は111冊あったが、そのうち、日本語訳は71冊あった[2]。文化部は2015年に「台灣文學翻譯出版補助計畫」を「台灣圖書國際版權資訊平台」（Books from Taiwan）に統合し、文学作品のほかに、児童文学、漫画なども重視するようになった。そして、2015年から「經典台灣文學外譯計畫」を行い、民間機構と提携して台湾の代表的な文学を世界に紹介するように努めている。なお、客家委員会は台湾客家文学の国際化を目指して、2018年に鍾肇政。《歌德激情書》、李喬。《藍彩霞的春天》、曾貴海。《曾貴海詩選》、利玉芳。《利玉芳詩選》、甘耀明。《冬將軍來的春天》を日本語に訳し、日本で売り出した。筆者の調査によると1979-2019年、台湾文学の日本語訳は118冊ある（図1を参照されたい）

1. 梁(2010)、劉(2017)による。
2. 詳しくは劉(2017)を参照されたい。



（図1）台湾文学の日本語訳（1979－2019年）

翻訳と言えば、起点言語（source language）を目標言語（target language）に変換する作業だと言われるが、それはただの言語形式の変換作業だけではなく、異文化交流のプロセスでもあるように思われる。また、翻訳する際、起点言語のテキストと目標言語の訳文の間に等価性が成立するのが理想的であるが、そのようにならないことも考えられる。例えば、中国語の第二人称の「你」は普通、「あなた」と訳されるが、しかし、〈你〉と「あなた」とは本当に「等価性」が成立するかどうか、いろいろな視点から考えなければならないことである。そして、中国語の〈深山〉に当たる日本語は「深山」、「深い山」、「奥山」、「奥深い山」といろいろ考えられるが、それぞれの言葉にどのような違いがあるのか、訳語を取捨選択するとき、何が基準になるのか、難しい問題である。特に、台湾の中国語作品を日本語に訳すことは、言語形式と共に台湾文化を日本語によって伝播するようになるので、たとえ翻訳者が起点言語の中国語に可能な限り近似した日本語の訳文を目指すように頑張ったといっても、文化の相違によって日本語話者に理解しかねる場合も考えられよう。例えば、台湾の〈山胞〉のことを「山岳民族」と訳しても、台湾事情に疎い読者ならば、それは台湾の先住民のことを指しているということまでは分からないのではないだろうか。このように、中日対訳から台日言語文化の相違が考察される。但し、台湾文学の日本語訳は文学鑑賞のためだけではなく、台湾文化の伝播にも繋がる。日本語訳が台湾文化を正しく伝えられるかどうか、その訳法によるところが大きいと思われる。

本論文では、黄春明作〈戰士，乾杯！〉及び下村作次郎訳「戦士、乾杯！」をテキストに、その日本語訳のストラテジーを分析し、台日言語文化の相違について見たうえで、日本語訳の台湾文化伝播における役割について考えたいものである。

2.考察対象

黄春明は戦後の台湾文学の代表作家の一人である。1988 年 7 月 8-9 日に中国時報に掲載され、1989 年に散文集《等待一朵花的名字》（皇冠出版社、1989）に再録された〈戰士，乾杯！〉は、作者黄春明が偶然、台湾先住民ルカイ族の若者であるドゥ・シオンの家·屏東好茶（ハオチャ）村に行ってその家族の物語を発見した後、自分の考え方を描いた散文である。戦士とはその家族の 4 世代の男性を指している。一族のために戦うほかに、日本兵、中国共産党軍、中国国民党軍のためにも戦った原住民の苦しい歴史的悲劇に作者が罪悪感を感じて描いた内容は鮮やかである。簡素な文章描写と雰囲気の醸造と登場人物の対話を通して、社会的に不利な先住民に対する作者の思いやりが深く示されている文章である。

訳者の下村作次郎は日本·天理大学名誉教授で、台湾文学研究者である。台湾文学研究関係の著書だけではなく、『抗日霧社事件の歴史 日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』（鄧相揚著、魚住悦子共訳、日本機関紙出版センター、2000）、『名前を返せ モーナノン/トパス・タナピマ集』（編訳、台湾原住民文学選、草風館、2002）、『空の目―シャマン・ラポガンの海洋文学（2）』（草風館、2015）『大海に生きる夢―大海浮夢』（シャマン・ラポガン著、草風館、2017）など、台湾先住民の作品の訳作がある。1991 年に訳された「戦士、乾杯！」は台湾文学の外国語訳が積極的に進められた初期の翻訳である。中国語作品の初出の 1987 年から 4 年間しか経っていない翻訳で、同翻訳文集『バナナボート』（JICC 出版局、1991）に収録されている 1940 年代の鍾理和「故郷」〈故鄉〉、1960 年代の白先勇「永遠の輝き」〈永遠的尹雪艷〉、「赤いつつじ」〈那片血一般紅的杜鵑花〉、1970 年代の張系國「バナナバート」〈香蕉船〉、「シカゴの裏街」〈水淹鹿耳門〉よりは新しい作品である。

3．先行研究

本論文では台湾先住民のことについて描かれた〈戰士，乾杯！〉の日本語訳における翻訳ストラテジーと特徴を考察するのが目的である。翻訳理論の概念に関わる翻訳ストラテジーは、広義では、翻訳の目標を達成するために訳者が使う一連の規則か原則であるが、狭義では、翻訳対象のテキストによって生じる問題や翻訳タスクを遂行する上での問題を解決するために使う方法である、とされてきた[3]。実務では、異化（foreignization）と同化（domestication）、直接翻訳（literal translation）と間接翻訳（free translation）、簡素化（simplification）と正規化（normalization）と明示化（explicitation）、低次元表示の主訳に高次元表示の説明としての次訳を入れるメタ表示（meta-representation）などの特徴が見られる。以下、それについて述べる。

3.1　異化と同化

同化と異化は Venuti（1995）によって提起された翻訳方略である。同化とは起点言語の言語的･文化的な特質に合わせるのではなく、目標言語の言語的･文化的な特質に合わせて翻訳の形式を決める方法である。同化という翻訳方略で、起点言語の文化は翻訳のプロセスで目標言語の規範に適合するように変えられる。例えば、20 世紀に台湾で放映されたとき、日本動画の「ドラえもん」が〈小叮噹〉になったのはその例である。一方、異化とは起点言語の言語的･文化的な特質に合わせて翻訳の形式が決められる方法である。この翻訳方法では目標言語より起点言語が重視されるので、目標言語にない異質の言語的･文化的な要素が新しく付加されるようになる。例えば現在、台湾で使われている〈多啦 A 夢〉（ドラえもん）、〈寶可夢〉（ポケットモンスター）などはその例である。異化は読者に外国の言語形式を提供し、異文化を体験させるとともに目標言語の文化と起点言語の文化との相違を観察させ、異国情緒を感じさせる。それに対して、同化は読者に異質

3. 河原（2014）は様々な翻訳ストラテジーを挙げているが、まとめてみると、ほとんどは翻訳結果を静的に捉え、起点言語と目標言語の相違を緻密に検証し、それぞれの基準でそれぞれを分類したものであるので、百人百様の分類になっている。

感を感じさせないことによって、自分のなれた言語形式や文化環境で情報をキャッチすることができる。

異化がいいか、それとも同化がいいのか、学者によって意見が分かれている。史（2010）によれば、Venuti（1995）[4]は同化を強い文化の言語がよく使う翻訳方法だと批判したが、それに対して、Gutt（1998）[5]は、起点言語を大事にする異化という方法は往々にして、訳者と読者との連携をなくすので、読者に訳者の伝えようとした情報を正確にキャッチすることができない恐れがある、という。

3.2 直接翻訳と間接翻訳

直接翻訳とは起点言語がそのまま目標言語に転移されることであるが、細かく分類すると、語彙の借用と言語構造や表現の借用と逐語訳の直訳に分けられる。直訳すると意味不明になったり、不文法になったり、目標言語に対応する表現を持たなかったりした場合、間接翻訳の方法が使われる。河原（2005）によれば、Vinay & Darbelnet（1958）[6]はフランス語・英語間の比較文体論の分析を行い、様々な翻訳のストラテジーと手順を明確にした。一般的な翻訳ストラテジーとして、直接的翻訳と間接的翻訳を挙げている。間接翻訳には品詞転換の転位、起点言語が変えられても目標言語では不適切で慣用的でない場合に使われる調整、諺などの同一状況を異なった文体や構造に訳す等価、目標言語に存在しない文化的言及対象を変える翻案などの方法がある。以上のストラテジーは語彙、統語構造、メッセージといった異なったレベルで作用する。メッセージは語順、主題構造、接続語句を含むといわれる。

3.3 簡素化·正規化·明示化

1990年代初期、記述的翻訳研究とコーパスが結合した翻訳研究（Corpus-based Translation Studies）が提案され、実証的な観点から翻訳活動を系統的に記述・研究することが唱えられた。そして、Baker（1993,1995）[7]は翻訳テキストには複雑

---

4. Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.
5. Gutt, E.-A. (1998). Pragmatic aspects of translation: Some relevance-theory observations.In L. Hickey (Ed.), *The pragmatics of translation* (pp. 41-53). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
6. Vinay & Darbelnet,（1958）*Stylistique comparedu français et de l'anglais* Paris: Didier.
7. Baker, M. (1993). Corpus Linguistics and Translation Studies: Implication and Applications. In

な統語を簡単なものに変えたり、繰り返しを省略したりする「簡素化」（simplification）、目標言語の文法に適合させるために主語、対象語などの省略された語彙を復元する必要がある「正規化」（normalization）、原文よりも詳細に説明する傾向を表わす「明示化」（explicitation）という３つの特徴があると主張した。

3.4　メタ表示

史（2010）で「後設表述」という中国語に訳された‘meta-representation’という用語は、成瀬（2016）によれば、心理学では「メタ表象」、言語学では「メタ表示」と訳されることが多いという。例えば、例（1-2）における〔〕内の説明は前の主訳の名詞（低次元の言葉）を詳しく説明した次訳（高次元の説明文）である。このような低次元表示の言葉である主訳に高次元表示の言葉である次訳を入れるのは、「メタ表示」である。

（1）顧炎武〔明末の人。清代考証学の祖〕

（2）月桃〔ショウガ科の多年草〕

４.考察と分析

本節では文化詞、人称代名詞、文体、使役と受け身、調整、メタ表示という視点から日本語訳「戦士、乾杯！」を考察する。考察にあたり、転位、音訳、直訳のほかに以下のような調整の訳法を用いる。

（A）増訳　起点言語から目標言語に翻訳される場合、内容が増やされることである。

（B）減訳　増訳とは違って起点言語から目標言語に翻訳される場合、内容が減らされることである。

（C）変訳　目標言語の文法や慣用表現に合わせて品詞や表現などが変えられることである。

M.Baker, G. Francis & E. Tognini-Bonelli (Eds.), *Text and Technology: In Honour of John Sinclair* (pp. 233-250). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. Baker, M. (1995). Corpora in translation studies: An overview and some suggestions for future research. *Target, 7,* 223-243.

（D）反訳　起点言語から目標言語に翻訳される場合、肯定、否定の表現が逆になることである。

（E）倒訳　目標言語に合わせて成分の順序を変えて訳されることである。例えば目的と動作を表す成分の語順が変えられるなど。

（F）分訳　起点言語の 1 文が目標言語では複数の文に分けて訳されることである。

（G）合訳　起点言語の複数の文が目標言語では 1 文に訳されることである。

4.1　文化詞

文化詞は学者によって定義が違うが、論者は賴（2019）に従って異文化交流という視点から台湾文化の特徴を表す語彙を指すことにする。本論文では地名、人名、「山胞」にしぼって考察する。

4.1.1　地名

「戦士、乾杯！」における地名は次のように訳されている。台湾の地名を日本語の漢字表記に直訳するのは多いが、メタ表示の翻訳方略も見られる。例えば、日本にない「大甲媽祖參拜団」のことは〔大甲は地名で台中県内。媽祖は航海の女神。誕生日の旧暦三月十五日に各地の媽祖廟から北港などの大廟に里帰りの参拝団が組まれる〕のように、地名、神名、参拝団の説明を〔〕に入れて読者に情報を提供する。そして、〈中國〉を「我が国」のように変訳に調整された例もある。但し、「山地門」が「三地門」になったのはミスプリントだと思われる。

表 1　「戦士、乾杯！」における地名の翻訳方略

原文	日本語訳	翻訳方略
屏東縣	屏東県	直訳
霧台鄉	霧台郷	直訳
好茶村	好茶村	直訳
臺北	台北	直訳
北投	北投	直訳
太平洋	太平洋	直訳
南洋	南洋	直訳
日本	日本	直訳
菲律賓	フィリピン	直訳

臺灣	台湾	直訳
大陸	大陸	直訳
阿禮	阿礼	直訳
中國	我が国	調整　変訳
大甲	大甲〔大甲は地名で台中県内。〕	メタ表示。中国語の漢字表記に日本語の説明を付け加える。
九州	九州〔九州は中国全土のこと。古代、中国を九州に分けた。〕	メタ表示。中国語の漢字表記に日本語の説明を付け加える。
五岳	五岳〔五岳は天子が祀った五つの名山〕	メタ表示。中国語の漢字表記に日本語の説明を付け加える。
山地門	三地門	ミスプリント

4.1.2　人名

表 2 「戦士、乾杯！」における人名の翻訳方略

原文	日本語訳	翻訳方略
熊	シオン	音訳。片仮名で中国語の漢字の発音を表記する。
羅牧師	ルオ牧師	音訳。片仮名で中国語の漢字の発音を表記する。
老黃	黄（ホワン）さん	意訳と音訳とメタ表示。漢字表記の中国語に片仮名で中国語の発音のルビを付ける。
杜先生	杜（トウ）さん	音訳にメタ表示。漢字表記の中国語に片仮名で中国語の発音のルビを付ける。
魯凱族	ルカイ族〔南部の中央山地に分布居住。好茶村が原郷とされる〕	音訳にメタ表示。片仮名で中国語の漢字の発音を表記され、日本語の説明を付け加える。
媽祖	媽祖〔媽祖は航海の女神。〕	直訳にメタ表示。中国語の漢字表記に日本語で説明を付け加える。
顧炎武	顧炎武〔明末の人。清代考証学の祖〕	直訳にメタ表示。中国語表記に日本語の説明を付け加える。
耶穌	キリスト	直訳。カタカナ表記で外来語に訳す。

〈戰士，乾杯！〉の主要登場人物は作者と山地青年の〈熊〉である。ここでは、〈熊〉と作者の日本語訳について考察する。まず、作者のことは「黄さん」と呼ばれたが、一回目のとき、「黄」に「ホワン」というルビが付けられている。それに対して〈熊〉は「シオン」に訳された。〈戰士，乾杯！〉の原文においては、登場人物の〈熊〉は 56 回見られる。そのうち、日本語訳では固有名詞「シオン」に訳されたのは 43 回ある。そのほかに「彼」は 9 回、「彼の姿」は 1 回、省略は 3 回ある。ほかの人名では表 2 のように、音訳、意訳と音訳とメタ表示、音訳とメタ表示、直訳にメタ表示、外来語への意訳の翻訳方略が見られる。そのうち、〈羅牧師〉は「ルオ牧師」、〈杜先生〉は「杜さん」にルビ「トウ」、というように同じ類型の人名なのに違った方略で訳された例も見られる。

4.1.3 「山胞」

台湾では昔、先住民のことを〈蕃〉とか〈山地同胞〉と呼んでいたが、現在では〈原住民委員會〉のように、〈原住民〉[8]という。「戦士、乾杯！」の原文において、地の文では先住民のことを〈山胞〉、〈山地〉、〈山地人〉、〈少數民族〉と呼んでいるが、「シオン」という先住民は自分のことを〈山地人〉という。日本語訳では場所の場合は「山地」というが、〈山胞〉は「少数民族」「山岳民族」に、シオンの言葉における〈山地人〉は「山地の人間」「山地の連中」「ここの連中」になっている。ちなみに、原文の「山地話」は特定の「ルカイ語」か「彼らの言葉」と訳されている。

表 3 「戦士、乾杯！」における「山胞」の日本語訳

中国語	日本語訳	表現者
引起我凝視這樣的事情，是十五年前，一個偶然的機會，在屏東縣霧台鄉好茶村一位**山胞**家的牆壁上發現**的**。	私がそのことに関心をもつようになったのは、十五年前、ある偶然から、屏東県霧台郷好茶村の**少数民族**の家の壁にその事実を発見したからである。	作者
這時候我才在昏黃的燭光中，看到他們房子裡面的情形；印象中和我過去所見過山胞的房子，並沒有多大的差別，只是更簡單些，用溪谷兩旁黑石頁岩做建材，是魯凱族的建築特色。	その時やっと薄暗い明かりで家の中の様子が見えた。ちょっと見た目には、これまで見たことのある**山岳民族**の家とそれほど変わらなかったが、ただそれよりいくぶん簡単な作りで、ルカイ族（南部の中央山地に分布居住。好茶村が原郷とさ	作者

8. 内政部戸政司の資料によると、2020 年 6 月 30 日現在、台湾先住民の人口は 573, 980 人ある。

	れる）の建築の特色どおり、渓谷から切りだした黒い石板でできていた。	
當然，對山胞而言，從歷史來看，他們只有被攻擊而已。	もちろん、**彼ら山岳民族**の場合、歴史的に見ると、攻撃されるばかりだった。	作者
這種沒有個人，只有種族、民族的集體意識，把個人的犧牲視為度外的哲理，不知是熊懂得這個道理，或這個道理已經成為**山地人**的文化中的文法，每個人不用懂得也會做。	このような、ただ種族や民族の集団意識だけがあって個人という意識がない、個人の犠牲を度外視する哲学をシオンは理解しているのだろうか。あるいは**山岳民族**の文化の中で不文律となっていて、理解するまでもなく誰もが自然に会得しているものだろうか。	作者
他不會明白我為我們來開拓臺灣的祖先，一直到我們對**山地人**所構成的結構暴力，找到原罪的那種心情的。	台湾を開拓した我我の祖先が、**彼ら山岳民族**に対して作りあげてきた抑圧的な構造のゆえに、私が原罪にも似た罪の意識を感じるに至ったことなど彼には知るよしもなかった。	作者
天哪！天哪！我為這個家庭，為這個**少數民族**，還為我的祖先來開拓臺灣，所構成的結構暴力等等雜亂的情緒，在心裡喃喃叫天。	いつの間にか、心の中で「ああ、天よ」と叫んでいた。この家族のことやこの**少数民族**のこと、さらにわが祖先が台湾を開拓したことによって作りあげられた抑圧的な構造などのことを考え、すっかり混乱していたのだ。	作者
我還記得，我在淚溼了的筆記本上，抓起原子筆，不大聽使喚的原子筆，歪歪斜斜的寫著：世界上，哪裡還有比這更辛酸的歷史？哪裡還有比這更悲慘的少數民族的命運？	私は今でも覚えている。涙に濡れたノートに、思うように動かないボールペンを握ってゆがんだ字でこう書いたのだ。世界のどこにこれ以上辛酸をなめた歴史があろうか。どこにこれ以上悲惨な**少数民族**の運命があろうか、と。	作者
沒想到，卻在山地門到霧台的鐵牛車上，結識了一位叫作「熊」的**山地青年**杜先生。	ところが、思いがけず山地門から霧台に向かうトラクターの上で、「シオン」という名前をもつ**少数民族の青年**、杜さんと知りあった。	作者
「做什麼？山地人打獵啊。」	「なにをしていたかですって？**山地の人間**は、猟をしていたに決まってますよ」。	シオン
「是啊，我們**山地人**，很多都是這樣的。」他的語氣又歸平淡。	「ああ、**山地の連中**は、みなうちと同じさ」。彼のしゃべり方は、また淡々とした調子に戻った。	シオン

4.2 人称代名詞

中国語の単数第一人称代名詞〈我〉の日本語訳は次のようになる。「私」に訳されたのは 65 例、「こちら」は 1 例、「ぼく」は 4 例、「僕」は 1 例、「自分」は 3 例、「息子」は 1 例、省略された箇所は 103 ある。「ぼく、僕」は会話における訳語である。そして、「私の足」「私の顔」という訳語に調整された例も見られる。なお、中国語では〈我（的）+家族名〉の形式は日本語では〈我〉にあたる部分が略され、家族名だけになる。例えば、「おふくろ」「おふくろのやつ」

〈我媽媽〉、「おやじ」〈我老爸〉、「じいさん」〈我祖父〉、「ひいじいさん」〈我的曾祖父〉、「おふくろのほうのじいさん」〈我的外祖父〉、「一番上の兄貴」〈我大哥〉、「二番目の兄貴」〈我二哥〉など。複数の〈我們〉にあたる日本語訳は「私たち」は 2 例、「ぼくら」は 2 例、「僕ら」は 1 例、「二人」は 2 例、省略は 21 例ある。そして、〈我們（的）～〉にあたる訳語は「ここ」、「この村」、「われわれの～」、「わが～」、「我が家の～」は 1 例ずつ観察された。

（3）我們的溝通，大致像是在生火，在還沒有點著之前，不繼續吹，火種就會熄滅。

だから、私たちの会話は火種をたやさないようにたえずあおぎつづけているようなそんな会話だった。

（4）從我們小時候，媽媽說她再不嫁人，就養不起我們兄弟了，每年都這樣講，結果還是沒有嫁。

おふくろは、ぼくらが小さいころから、再婚しないとぼくらを育てられないとこぼしてたが、毎年そう言いながら、結局は嫁に行かなかった。

（5）「如果有照片，和日本兵、共匪，還有我們中國國軍掛在一排，嘿，那真熱鬧。」熊很輕鬆的說著。

「写真があって、日本兵、共産兵、それに我が国民党兵が一緒に並んだら、ウーン、そりゃ、賑やかだな」。シオンは、事もなげに言った。

（6）他不會明白我為我們來開拓臺灣的祖先，一直到我們對山地人所構成的結構暴力，找到原罪的那種心情的。

台湾を開拓した我我の祖先が、彼ら山岳民族に対して作りあげてきた抑圧的な構造のゆえに、私が原罪にも似た罪の意識を感じるに至ったことなど彼には知るよしもなかった。

（7）村子呢？熊說在前面，我們差不多又走了十多分鐘才到。

村はどこだろう。この先だ、とシオンは言った。それから約十分ほど歩いてやっと村に着いた。

（8）「沒什麼，我們吃麵。」

「なんでもありません、うどんを食べましょう」

中国語の単数第二人称代名詞〈你〉にあたる日本語訳は次のようである。作者の名前「黄さん」に調整されたのが 4 例、「君」に訳されたのが 1 例、複数の「おまえたち」に調整されたのが 1 例、省略されたのは 38 例あるが、そのうち「お父さん」〈你爸爸〉、「おじいさん」〈你祖父〉、「お母さん」〈你媽媽〉のような例もある。そして、〈你看〉は転位として感動詞「ほら」に調整された。複数の〈你們〉は「あなた方」（1 例）、「あなたがた」（1 例）、「おまえたち」（2 例）のほかに、単数の「あなた」「君」に調整されたのが 2 例、省略されたのが 2 例ある。中国語では〈你〉がよく使われる代名詞であるが、それにあたる日本語の第二人称代名詞「あなた」は用法に制限がある。一般的には相手の名前に敬意を表す接尾辞を付けるか職名で呼ぶのが普通である。そして、相手の家族に言及するときは中国語では〈你+家族の呼び名〉か〈令～〉の形式になるのに対して、日本語では「お父さん」、「おじいさん」、「お子さん」のようになる。なお、（例 15－16）のように〈你〉で自分自身のことを表すことも見られる。

（9）「不要理她，你也喝一點點。」

「気にしないで、黄さんも少し飲んで」

（10）「如果你想喝，你就喝吧，不要理我。」

「君が飲むんなら、どうぞ。ぼくのことは気にしないでかまいませんから」

（11）「不會。你拿去，快去睡覺。」

「そんなことありませんよ。おまえたちいただいて、さっさと寝るんだ」。

（12）「對，和你們漢人打過很多次的仗。羅牧師說，我的祖父和曾祖父他們很幸運，他們都為我們魯凱族自己打過仗。」

「そう、あなたがた漢民族と何回も戦った。ルオ牧師は、じいさんやひいじいさんたちは運がよくて、ずっとルカイ族自身のために戦ったと言っている」

（13）「你們要往裡面擠一點，留一個地方，今天晚上叔叔要和你們睡在一起。」

「おまえたち、少しずつ詰めあって、場所を空けておくんだぞ、今晩は、おじさんが一緒に寝るからな」

（14）「你有沒有想到，他們是你們的一家人啊？」我認真的問著。

「この人たちはみな、あなたの身内だって考えたことありますか？」私は真剣に訊いた。

（15）「讓你覺得又難過又憤怒……」

「悲しくて腹が立つといった……」

（16）「我的外祖父他也是戰士。他說我們燒死一窩螞蟻，然後你又在別的地方看到螞蟻的時候，你就知道剛才那一窩螞蟻，並沒有被燒死。」

「おふくろのほうのじいさんも戦士だったんだ。このじいさんが言ってたな。アリを巣ごと焼きっくしても、そのあとよそでアリを見た時、さっきのあのアリの巣が決して焼きつくされていなかったんだとわかるってね」。

第三人称代名詞〈他〉の訳語は「彼」（39 例）、「自分」（1 例）、「それ」（2 例）、「この人」（1 例）、「その人」（1 例）、「この老人」（1 例）、「その子」（1 例）、「このじいさん」（1 例）、「じいさん」（1 例）、「牧師」（1 例）、「兄貴」（1 例）、「彼（の家族）」のほか、省略は 43 例ある。女性を表す第三人称代名詞〈她〉は「彼女」になっている。複数の〈他們〉は「彼ら」は 3 例あるが、「やつら」（1 例）、「～たち」（6 例）、「ガキども」（1 例）、「みな」（1 例）、「みんな」（1 例）、「兄貴の部隊」（1 例）のように具体名詞に訳されたのもある。そして、省略されたのが 10 例ある。なお、犬の〈他們〉は「一匹一匹」と訳された。

（17）熊趕緊為我這個初次謀面的冒失鬼發誓，說他絕對沒有不歡迎的意思。

初対面でぶしつけな頼みをする私に対し、彼は迷惑だなんてとんでもないと慌てて言った。

（18）日本人說他很勇敢，牆上還有他的獎狀。」

日本人が、その人は勇敢だったと言っていたな。賞状も掛かってる」

（19）生怕我不知道他的意思，他又說：「真的把一窩螞蟻全都燒死了，你知道？」

自分の言った意味がわからないのではないかと思ったのか、彼はまたこう言った。「本当にアリの巣ごと全部焼きつくすんだよ。わかる？」

（20）熊說他母親以為我們在喝酒，她也想喝一點。

僕らが酒を飲んでいるものだと思い、彼女も飲みたがっているんだ、と彼は言った。

（21）難怪熊談起那些人像和他們不幸的遭遇時，才顯得那樣地淡然。

だから、シオンが写真の人物や彼らの不幸な体験を話す時、あのような平然とした語り口になるのだろうか。

（22）「不是。羅牧師是我們魯凱族的人。他說我的祖父曾祖父他們是我們魯凱族的戰士。」

「いや、ルオ牧師はルカイ族の人だ。じいさんやひいじいさんたちはルカイ族の戦士だって、牧師が言っている」

（23）去跟一個根本和他們無冤無仇的人，把他們當作不共戴天的敵人敵對起來。

なんの恨みもない人びとを不倶戴天の敵として戦った例がある。

「戦士、乾杯！」の日本語訳では再帰代名詞「自分」が 8 回使われた。その中国語の原文を見てみると、〈自己〉に当たる訳語は 4 例、〈他〉に当たる訳語は 1 例、〈我〉に当たる訳語は 1 例、増訳は 2 例ある。（24）（25）では中国語の人称代名詞が直接的表現であるのに対して、日本語訳の「自分」は内省的なもので、間接的·客観的な表現だと思われる。そして、（26）（27）の日本語訳ではゼロ代名詞ではなく、「自分」が増訳されたことによって、誰のうどん、誰のどんぶりなのか、はっきり分かるようになった。

（24）生怕我不知道他的意思，他又說：「真的把一窩螞蟻全都燒死了，你知道？」

自分の言った意味がわからないのではないかと思ったのか、彼はまたこう言った。「本当にアリの巣ごと全部焼きつくすんだよ。わかる？」

（25）我不能完全明白為什麼，我卻清楚地意識到我正害怕著。

なにかを恐れていることをはっきりと自分で意識した。

（26）「這碗再給你。」我把麵推過去。

「これもどうぞ」。私は、自分の分を彼にすすめた。

（27）剩下來他全都倒入麵碗裡，剛好一碗。

残りを全部自分のどんぶりに入れると、ちょうどいっぱいになった。

まとめてみれば、中国語の単数第一人称代名詞〈我〉は 202 例あるが、それにあたる日本語訳は人称代名詞は単数 74 例、その他は 25 例、省略は 103 例ある。中国語の複数第一人称代名詞〈我們〉（33 例）にあたる日本語訳は人称代名詞は 5 例、その他は 7 例、省略は 21 例ある。中国語の単数第二代名詞〈你〉は 45 例あるが、それにあたる日本語訳は人称代名詞は単数 2 例、その他は 9 例、省略は

34 例ある。複数第二代名詞〈你們〉8 例に対応する日本語訳は人称代名詞 6 例、省略は 2 例ある。中国語の単数第三代名詞〈他〉は 94 例あるが、日本語訳では人称代名詞は 39 例、その他は 12 例、省略は 43 例である。女性を表す代名詞〈她〉の 1 例は人称代名詞の「彼女」になっている。中国語の複数第三代名詞〈他們〉の 25 例に対応する日本語訳は人称代名詞は 3 例、その他 11 例、省略は 11 例である。中国語の人称代名詞の多くは日本語訳では省略されたわけである。

表 4 中国語人称代名詞の日本語訳

			日本語訳			
			人称代名詞	その他	省略	合計
中国語原文	第一人称	我	74	25	103	202
		我們	5	7	21	33
	第二人称	你	2	9	34	45
		你們	6	0	2	8
	第三人称	他	39	12	43	94
		她	1	0	0	1
		他們	3	11	11	25

このように、中日両言語における人称代名詞の使い方がだいぶ違っていることが分かる。中国語では人称代名詞を一々示さないと意思不明になる恐れがあるのに対して、日本語では文脈によって人称代名詞が略されるのが普通である。一般的には第一人称の使用は臨場感、躍動感、第二人称の使用は相手へ迫る語りかけの印象、第三人称の使用は客観的イメージだと思われる。「戦士、乾杯！」の起点言語の中国語でも目標言語の日本語訳でも第一人称代名詞が第二人称代名詞、第三人称代名詞より多く用いられているので、その描写は生き生きとした臨場感を醸し出しているのである。

なお、中国語では家族のことや自分の所属するところのことに触れた場合ではよく〈（人称代名詞）（的）+〇〇〉という言語形式が使われるが、日本語では家族の呼び名かほかの実質名詞が使われるのが普通である。

（28）「去，去，去。我媽媽又把他們吵醒了。是我哥哥的小孩，還有三個。」
「寝なさい。おふくろのやつまたガキどもを起こしてしまった。兄貴の子で、ほかに三人いるんだ」

（29）「有。她說她命不好，說我不給酒喝，要我爸爸，我們的祖先評評理。都是和死人說話，和牆壁上的人像說話。不要管她，今晚她會唱到天亮的。來，」
「ああ。運が悪い、息子が酒をくれないと言って、おやじや先祖に不平を訴えているんだ。全部、死んだ人や壁に掛かった写真の人物にしゃべりかけてね。放っとけばいいのさ。夜通し歌ってるんだから。じゃあ」。

（30）「是啊，他是臺灣光復後，最後一批去大陸打仗（戰）的，我們村子裡有好多人去了。聽說他們都被八路軍抓去當共匪的匪兵。」
「そうさ、台湾が祖国復帰してから、最後に大勢の人が大陸に行って戦争をしたらしいけど、この村からもたくさん行ったんだ。でも、みんな八路軍（略）につかまって共産兵にさせられたって聞くよ」

（31）「（前略）這是我大哥。」他引我看大鏡框裡面的小照片，指著穿迷彩裝的國軍說：「他也死了。（後略）」
「（前略）これは一番上の兄貴」。彼は、大きな額縁の中の小さな写真のほうを見せ、迷彩服を着た国民党の軍人を指さして言った。「兄貴も死んでしまった。（後略）」

4.3 文体

本節では会話文の文末における文体について見てみたい。日本語訳「戦士、乾杯！」において、作者の黄による発話 24 のうち常体は 5 例、敬体は 19 例あるが、シオンの発話 58 のうち、常体は 51 例、敬体は 7 例ある。子供の発話 1 例は常体である。例を見てみよう。（32-34）は作者の黄の常体の発話、（35-37）は作者の黄の敬体の発話、（38-40）はシオンの常体の発話、（41-43）はシオンの敬体の発話、（44）は子供の常体の発話である。中国語の文法形式では敬体、常体の使い分けがはっきりしていないので、発話者の態度や相手との心理的距離は文字ではあまり分からない。それに対して、日本語では敬体か、常体かの使い分けによって表現者の相手に対する配慮や敬意が分かるようになる。これは中国語と日本語の表現の相違点であるし、また翻訳の難所でもある。

（32）「羅牧師是外國人？」　「ルオ牧師は外国人なの」
（33）「對，我這裡有餅乾。」　「そうだ、ビスケットがあったな」。
（34）「你們小孩也喝酒？」　「子どもたちも飲むの？」
（35）「日本兵的隔壁這一張是誰？」「日本兵の隣のこの人は誰ですか？」
（36）「你爸爸？」我心裡覺得他的回答方式很奇怪。
「お父さんですか？」私は、へんな言い方をするものだと思って訊いた。
（37）「你祖父有沒有照片？」　「おじいさんの写真は残っていますか？」
（38）「我媽媽說他在菲律賓戰死了。日本人說他很勇敢，牆上還有他的獎狀。」
「おふくろの話では、フィリピンで戦死したということさ。日本人が、その人は勇敢だったと言っていたな。賞状も掛かってる」
（39）「這是我二哥。（後略）」　「これは、二番目の兄貴でね。（後略）」
（40）「他打過熊。我們山地的老人，都說他年輕的時候打過熊。」
「じいさんは、熊を仕留めたことがあってね。ここの年寄り連中はみな、じいさんが若いころ熊を仕留めたと言ってるよ」
（41）「因為你對照片有興趣，我才告訴你他們的故事，不然看照片有什麼意思。」
「黄さんが写真に興味をもったようだから話したまでで、写真を見たってなにもおもしろいことなんかありませんよ」
（42）「做什麼？山地人打獵啊。」
「なにをしていたかですって？　山地の人間は、猟をしていたに決まってますよ」
（43）「來到山上隨便。過來，沒有菜開魚罐頭來吃。」
「山に来ると、ありあわせで。さあ、なにもありませんが、魚の缶詰を開けて食べましょう」
（44）「你在吃什麼？」　「なに食べてんの」

4.4　使役と受け身

〈戰士，乾杯！〉における使役用法は原文の中国語では〈叫〉、〈令〉、〈使〉、〈讓〉、〈引起〉の用法は 11 例あるが、日本語訳では「～（さ）せる」形式の用法は 10 例ある。その内訳は次のようになる。
（イ）中国語の使役用法が日本語でも使役用法であるもの（3 例）

（45）不過，我這個陌生人在空氣中散發出來的氣味，倒是叫全村子裡的狗騷動一時。

しかし、空中に発散するよそものの匂いが村中の犬を騒がせた。

（ロ）中国語の使役用法が日本語では主動的用法になったもの（9 例）

（46）我的話使他沉思起來。

そう言うと、彼は考えこんだ。

（47）她改用唱歌，其實就是用半唱半誦，沒什麼旋律，這種聲音在白天聽起來不會覺得怎麼樣，可是，在這深山的夜晚，像整個世界都充滿了它的那種感覺，叫人寒毛豎立。

その代わり歌を歌いはじめた。メロディーと言えるほどのものがなく、歌うような朗誦するようなその声は、昼間聞けばなんということもないのだろうが、山奥の夜更けに聞くと、まるで世界中がその独特の感覚に充たされてしまったかのようで総毛だった。

（48）你是不是想看到他們也被掛在哪裡？」熊的話叫我嚇了一跳，我正在想這個問題。

そこに掛かっていたらと思ったんじゃないの」。シオンの言葉にドキッとした。

（49）「讓你覺得又難過又憤怒……」（前出例 15）

「悲しくて腹が立つといった……」

（ハ）中国語の意味的使役用法が日本語訳では使役用法になったもの（1 例）

（50）我知道我抑壓不住慟哭，我只求不要發出聲音，不要失態，不要驚動別人。

もう慟哭を抑えきれなかった。しかし、声をあげ、取り乱して、ほかの人を驚かせることだけはしたくなかった。

（二）中国語の主動的用法が日本語訳では使役用法になったもの（6 例）

（51）熊的母親也回話，但是熊用稍微大一點的聲音把她壓下來。

シオンの母親も言いかえしたが、彼はそれ以上に大きな声を張りあげて黙らせた。

（52）最小的拿了東西，熊啪一聲不輕不重的打在他的頭上說：「謝謝不會說！」

シオンは、一番小さな子に持たせると、ポンとその子の頭を軽くたたいて言った。「ありがとうは？」

（53）一切都安静下来了，靈歌的裊繞，更顯得夜静。

なにもかもすっかり静まりかえり、嫋嫋（じょうじょう）と響く歌の余韻が夜の静けさをいっそう際立たせた。

使役用法において、原文の中国語と日本語訳で表現がだいぶ違っている。特に感情表現では中国語の使役用法の多くは日本語訳で主動的表現になるのが観察される[9]。このような中日語における表現の相違は台湾の日本語学習者の難問になることが考えられる。

一方、受身表現は次のようである。中国語の原文では受身表現が 14 例あるが、日本語訳では受身表現が 15 例見られる。

（イ）中国語の受身表現が日本語訳では受身表現のままであるもの（9 例）

（54）閒談中，我被他的村名「好茶」迷住了。

話をしているうちに、彼の村の「好茶」という名前にひかれて行ってみたくなった。

（55）聽説是到大陸突襲，被共匪打死的。

大陸に奇襲攻撃をかけた時に、共産兵に殺られたらしいんだ。

（ロ）中国語の受身表現が日本語訳では主動的表現になったもの（4 例）

（56）要不是熊沿路一直吆喝那些狗，恐怕全村的人都會被吵醒起来。

もしシオンがどなりつづけてそれらの犬をしかりつけなければ、おそらく村中の人が目を覚ましてしまっていただろう。

（57）「我的母親也被你嚇壞了。不然她一定會唱到天亮。」

「おふくろもびっくりしたんだな。さもなきゃ、夜が明けるまで歌っていたはずさ」

（ハ）中国語の主動的表現が日本語訳では受身表現になったもの（4 例）

（58）「不是，我是我媽媽後来再結婚生的。」

「いや、ぼくは、おふくろが再婚してから生まれたんだ」

9. 日本語の感情表現と使役については賴(2008、2009)を参照されたい。

（59）然而，在掛滿錦旗和獎狀的牆壁間，還掛了兩個裡面排滿了小照片的鏡框，和單獨個別鑲在框子裡的三張人像。

壁にはベナントと賞状がところ狭しと掛けられている。このほかにも写真がいっぱいに入れた額縁がふたつと、別々の額に入った三枚の人物写真が掛かっていた。

（ニ）中国語の指定表現が日本語訳では受身表現になったもの（1 例）

（60）所以這個比喻的另一個意義是抵抗；只要還有一兵一卒，就還有希望。

だから、この比喩には抵抗という別の意味が含まれている。兵士が一人でも残っていさえすれば、まだ希望がある。

（ホ）中国語の主動的用法が日本語訳では使役受け身用法になったもの

（61）「是啊，他是臺灣光復後，最後一批去大陸打仗（戰）的，我們村子裡有好多人去了。聽說他們都被八路軍抓去當共匪的匪兵。」

「そうさ、台湾が祖国復帰してから、最後に大勢の人が大陸に行って戦争をしたらしいけど、この村からもたくさん行ったんだ。でも、みんな八路軍（国民革命軍第八路軍。一九四七年に人民解放軍に改編）につかまって共産兵にさせられたって聞くよ」

4.5　調整

「戦士、乾杯」では順訳のほかに、増訳（例 62）、減訳（例 63）、変訳（例 64）、反訳（例 65）、倒訳（例 66）、合訳（例 67）、分訳（例 68）などのストラテジーが用いられた。

（62）「會！我會再來好茶和戰士乾杯。」

「ええ、きっと。僕は、また好茶に来て、戦士に乾杯しますよ」

（63）我可能走不過他，但是我的腳力健得很，算是相當能走路的人。

たぶん彼にはかなわないだろうが、しかし脚力にはかなり自信があった。

（64）他舉起杯子，「歡迎你，我們喝一口。」他喝了一大口。

彼はコップを持ちあげると、「歓迎のしるしに、一杯」と言って、ゴクゴクと飲んだ。

（65）他沒死。　まだ生きてる。

（66）「喲！你們起來幹什麼？」

「おいおい、おまえたち、なにしに起きてきたんだ」

（67）我的心變得好脆弱，好像不能再裝載一點什麼。我楞了。

私は、もうなにも受けいれられないほどに弱々しい気持ちになり、ボーッとなった。

（68）當約略七八隻狗出現在跟前繞著我們，並對我還特別多了一道手續，他們一個個湊過冰涼的鼻子嗅嗅我的手。

七、八匹の犬がまとわりついてきた。特に私には念入りな出迎えで、一匹一匹冷たい鼻を寄せてクンクンと手を嗅ぎにきた。

調整の訳法では下の例で見るように、日本語訳における接続詞、接続助詞、終助詞の増訳は中国語の言語形式とだいぶ違うので教育現場の重要指導項目の一つである。

（69）「怎麼可能？又是在我們山上。」

「そりゃ無理だなあ。だって、山から出たことがないんだもの」

（70）我環顧四周，仍然是一片烏漆抹黑，一點燈火都看不見。

あたりを見まわすと、一面まっ暗で明かりひとつ見えなかった。

（71）「很好吃你不想吃？沒有別的東西了。」

「おいしいのに、食べないの。ほかになにもないよ」

（72）「老黃，你會喝酒。來，我們喝我們的小米酒。」熊又去找小米酒。

「黄さん、いけるんですね。じゃあ、今度は我が家の粟酒を飲みますか」。シオンは粟酒を探しにいった。

なお、一つの文で複数の調整訳法が用いられる例も見られる。例えば、(例 73)ではまず、日本語訳の文頭に「いつの間にか」という増訳が採られた。それから中国語原文の文頭の〈天哪！天哪！〉と文末の〈在心裡喃喃叫天〉が「心の中で「ああ、天よ」と叫んでいた。」という日本語訳になって文頭「いつの間にか」の後に置かれ、そして「。」が付けられて分訳の形にされた。更に、〈結構暴力〉が「抑圧的な構造」に変訳され、最後に「すっかり」という増訳訳法が使われた。

（73）天哪！天哪！我為這個家庭，為這個少數民族，還為我的祖先來開拓臺灣，所構成的結構暴力等等雜亂的情緒，在心裡喃喃叫天。

いつの間にか、心の中で「ああ、天よ」と叫んでいた。この家族のことやこの少数民族のこと、さらにわが祖先が台湾を開拓したことによって作りあげられた抑圧的な構造などのことを考え、すっかり混乱していたのだ。

以上見たような訳法はすべて目標言語の日本語にあわせた同化のストラテジーである。一部は訳者の選択だと思われるが、多くは日本語の表現に合わせた訳法である。そして、Baker（1993、1995）の主張から考えれば、原文の複雑な表現、分かりにくい表現を転位、減訳、分訳にしたのは簡素化の特徴、訳文の文法に合わせて原文の語順を変えたたり、反訳か変訳にしたりするのは正規化の特徴である。

4.6 メタ表示

日本語訳では日本語にない原文の文化詞を詳しい説明を付け加えるメタ表示という訳法がある。訳文に語や句や文を増やした増訳とは違って、メタ表示は読者に情報を提供する手段である。次の例で見るように、「戦士、乾杯！」におけるメタ表示は当該語彙の後ろに小さい字で二行に分けて〔〕に付け加えられるのである。このメタ表示は明示化という翻訳の特徴である。

（74）記得才跟完八天大甲媽祖進香團，回到臺北北投過了一夜，早上起來和小孩玩了一個上午，我又起身到屏東霧台去了。

八日間、大甲媽祖参拝団〔大甲は地名で台中県内。媽祖は航海の女神。誕生日の旧暦三月十五日に各地の媽祖廟から北港などの大廟に里帰りの参拝団が組まれる〕についてまわってやっと台北に戻り、北投で一泊、翌日は自宅で午前中いっぱい子どもの相手をすると、また屏東の霧台へ出かけた。

（75）想到這種情形，多少吻合了顧炎武鄙視清談，提倡實學的認知，要從直接和間接雙方面取得經驗；說九州歷其七，五岳登其四，重視實地調查云云，而覺得一路的辛苦是很有意義的。

そんなことを考えていると、顧炎武〔明末の人。清代考証学の祖〕が清談〔魏晋時代に起こった哲学的談論〕を軽んじて、直接、間接の両方の経験を重視し、実学による認識を提唱して「九州その七を歴て、五岳その四を登る」〔九州は中国全土のこと。古代、中国を九州に分けた。岳は天子が祀った五つの

名山〕と語り、実地調査を重んじた云々というのにいくぶん似て、道中の辛さも大いに意義があるように思えた。

（76）這時候我才在昏黃的燭光中，看到他們房子裡面的情形；印象中和我過去所見過山胞的房子，並沒有多大的差別，只是更簡單些，用溪谷兩旁黑石頁岩做建材，是魯凱族的建築特色。

その時やっと薄暗い明かりで家の中の様子が見えた。ちょっと見た目には、これまで見たことのある山岳民族の家とそれほど変わらなかったが、ただそれよりいくぶん簡単な作りで、ルカイ族〔南部の中央山地に分布居住。好茶村が原郷とされる〕の建築の特色どおり、渓谷から切りだした黒い石板でできていた。

5.むすび

「戦士、乾杯！」においては台湾の地名の多くは漢字をそのまま表記されたが、メタ表示で説明を付け加えられたのもある。台湾の人名、族名の場合は「杜（トウ）」さん、「黄（ホワン）さん」、「ルオ牧師」、「ルカイ族」のように異化で台湾語の発音にされ、カタカナ表記で示されているが、中国人名は漢字、先住民の人名はカタカ表記になっている。そして、「山胞」という先住民のことは登場人物によって「少数民族」か「山岳民族」か「山地人」に訳されている。

人称代名詞では省略という減訳法が多く採られた。特に家族名の場合、中国語でよく使われている〈我～〉は日本語訳では家族名が接辞といっしょに使われるのが普通である。散文〈戰士，乾杯！〉では作者は第一人称を語り手とした叙述形態を選んたので、第一人称代名詞が多く使われたが、その日本語訳ではそれが52.7%省略された。しかし、人称別から見て、日本語訳における第一人称代名詞が第二人称代名詞よりも第三人称代名詞よりも多いので、臨場感、躍動感が表されるのは原文と同じである。

敬体、常体の使い分けがあまり見られない中国語の文法形式に対して、日本語訳では敬体か常体かによって登場人物の態度や相手との心理的距離が分かる。このような訳法は同化である。使役用法と受け身用法では中日両言語で違うところ

があるので、同化の訳法も異化の訳法も見られる。但し、中国語で常用される使役風の感情表現は日本語では主動的に表現されるのが多い。

上述したほか、簡素化の特徴を持つ転位、減訳、分訳、正規化の特徴を持つ増訳、変訳、反訳、合訳、明示化の特徴を持つメタ表示が多く観察された。これで「戦士、乾杯！」は同化訳法によるところが大きいことを裏付けている。

下村作次郎による日本語訳「戦士、乾杯！」は、〈蛙人〉（軍事活動を行う水中工作員）を「水泳選手」に、〈嚥了一口口水〉（唾を飲み込む）を「ひと口ひと口飲みこむ」にした誤訳 が観察されたが、中国語の叙述形態に捉われず、台湾先住民の歴史、そして作者の考え方、気持ちが描かれた〈戰士、乾杯!〉を日本語の文法様式や慣用的表現で生き生きと翻訳した。言い換えれば、全体的には同化のストラテジーが多く用いられ、目標言語のルールに合った秀訳である。そういうわけで、台湾文学の日本語による伝播という役目は果たされたといえよう。

最後に、中日翻訳を日本語学習の方法として用いることを強くすすめたいものである。何故かというと、「戦士、乾杯！」のような日本語訳に触れることによって、台湾事情、台湾の物語を日本語で表現する力を養成することができるからである。今のところ、台湾文学の日本語訳者の多くは日本語母語話者である。一刻も早く自国の素晴らしい中日翻訳者が養成できるように、日本語教師としてもっと努力すべきだと思われる。

參考資料

黃春明（1989）。戰士，乾杯！**等待一朵花的名字**。台北：皇冠出版社。
下村作次郎 訳「戦士、乾杯！」『バナナボート』、東京：JICC 出版局、1991

參考文獻

史宗玲（2010）。文化專有菜單項目之翻譯：從「最佳關聯」至「後設表述」。**編譯論叢**，台北：國家教育研究院，117-145。

史宗玲（2011）。台灣籤詩英譯之論析。**編譯論叢**，台北：國家教育研究院，161-194。

劉容娟（2017）。台灣文學外譯研究概述。**2016台灣文學年鑑**，台南：國立台灣文學館，143-145。

梁欣榮（2010）。台灣文學中書外譯現況概述。**2009台灣文學年鑑**，台南：國立台灣文學館，154-158。

Venuti, L. *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge. 1995

河原清志「翻訳ストラテジー論の批判的考察」『翻訳研究への招待』No.12、東京：日本通訳翻訳学会、2014、121-140 頁

邱若山「中国語版『佐藤春夫　植民地之旅』の翻訳問題」『佐藤春夫と台湾　台湾旅行関係作品研究続編』、台中：樺豐出版社、2017、181-205 頁

国広哲弥「誤訳の解剖（1）」『神奈川大学言語研究』第 17 号、神奈川：神奈川大学、1995、115-132 頁

国広哲弥「誤訳の解剖（2）」『人文研究』第 124 号，神奈川：神奈川大学、1995b，69-95 頁

国広哲弥「誤訳の解剖（3）」『神奈川大学大学院紀要 言語と文化論集』第 2 号、神奈川：神奈川大学、1995c、70-91 頁

国広哲弥「誤訳の解剖（4）」『神奈川大学言語研究』第18号，神奈川：神奈川大学、1996、157-172頁

成瀬翔「心的ファイルとメタ表示」『名古屋大学文学部研究論集（哲学）』62、名古屋：名古屋大学、2016、35-53 頁

吉村正和「トランスレーション言説研究--意味の等価を超えて」『研究報告集　翻訳とマルチメディア』、名古屋:名古屋大学、2005、171-183 頁 www.lang.nagoya-u.ac.jp›socho›mirai　（2020 年 5 月 10 日閲覧）

賴錦雀「日本語感情形容詞の使役用法についての一考察—中国語との対照分析」『台灣日本語文學報』22号、台北：台灣日本語文學會、2008、43-64頁

賴錦雀「台湾人日本語学習者の作文における感情形容詞—東呉大学日本語文学系の場合」『東呉日語教育學報』32期、台北：東呉大學、2009、193-226頁

賴錦雀「台湾における文化詞の日本語訳」『台灣日語教育學報』32、台北：台灣日語教育學會、2019、294-323頁

劉明綱「コーパスに見る中日翻訳における「明示化」の特徴」『通訳翻訳研究』10、東京：日本通訳翻訳学会、2010、121-140頁

網路資料

内政部戸政司 https://www.ris.gov.tw/app/ （2020年7月10日閲覧）